



佐賀大学  
有明海  
総合研究  
プロジェクト

# NEWS LETTER

Ariake Sea Research Project

PHONE/FAX: 0952-28-8846

<http://www.ariake.civil.saga-u.ac.jp/>



## トピックス:

- 平成 19 年度 佐賀大学  
有明海総合研究プロジェクト  
成果公開シンポジウムの開  
催決定 ……1
- 有明海を取り巻く最近の状況  
～1枚 500 円の高価な海苔～  
～宙に浮いた有明海特産品～  
～有明海調査研究マスタープ  
ラン作成～ ……1,2
- 環境省の有明海・八代海総合  
調査推進業務について ……3
- 「日本水環境学会ノンポイント  
汚染研究委員会公開シンポジ  
ウム」が開催されました ……4
- 「有明海と環黄海」 ……5,6,7
- 加玲美非常勤研究員  
田代幸寛非常勤研究員  
プロジェクト研究に参加して ……8

## 平成 19 年度 佐賀大学 有明海総合研究プロジェクト 成果公開シンポジウム:

### 主催

佐賀大学  
有明海総合研究プロジェクト

### 会場

理工学部 6 号館

### お問い合わせ

佐賀大学  
有明海総合研究プロジェクト  
事務局

〒840-8502

佐賀市本庄町 1 番地

電話・FAX: 0952-28-8846

有明海を取り巻く最近の状況

～1枚 500 円の高価な海苔～

## 速報

平成 19 年度成果発表シンポジウム開催日が決定しました。

日時:平成 20 年 5 月 24 日(土)

場所:佐賀大学理工学部 6 号館

詳細が決まり次第、Web に掲載いたします。

<http://www.ariake.civil.saga-u.ac.jp/>

## 有明海を取り巻く最近の状況

有明海総合研究プロジェクト プロジェクト長

荒牧 軍治

### 1枚 500 円の高価な海苔

昨年 12 月、10 枚入り 5,000 円(消費税別)の高価な海苔が店頭に並びました。佐賀県水産課の肝いりで行われている「佐賀海苔」ブランド化の取組の一環で「佐賀海苔 有明海一番」と名付けられました。秋芽一番海苔 3 億枚強から選ばれた 36 万枚(0.12%)にだけ許された名称で、漁協における入札で、15.6 円の秋芽海苔全体の平均単価に対して、「佐賀海苔 有明海一番」は 194 円(高値 300 円/1 枚、安値 109 円/1 枚)12.4 倍ものご祝儀相場をつけました。2000 年冬に大規模な色落ち被害を発生させた海苔養殖は、この 4 年間は奇跡的ともいえる偶然

に助けられて豊作が続いています。しかし、豊作が続くとどうしても入札単価が下がってきます。「佐賀海苔」のブランド化は佐賀海苔が生き残っていくための避けて通れない道かもしれません。早速仲間と購入して食した「佐賀海苔 有明海一番」はキャッチフレーズ通り「うま味・香り・口どけ」のどれを取っても満足できるものでしたが、こんな高価なものを毎日食するわけにはいきません。物産所で買ってきて毎日焼いて食べている 1 枚 30 円くらいの高価な海苔だって十分に有明海の香りがします。是非試してください。



海苔の摘み取り風景

有明海を取り巻く最近の  
状況

～宙に浮いた  
有明海特措法～

## 宙に浮いた有明海特措法

有明海総合研究プロジェクトは、「有明海及び八代海を再生するための特別措置に関する法律」(有明海特措法)に従って文部科学省が実施する調査研究の一つと位置づけられています。その有明海特措法が現在、宙に浮いたままになっています。有明海特措法は、特別措置法ですから永久に継続することを念頭に置いて作られたものではありませんが、特に明確に期限を設けてある法律でもありません。しかし、有明海・八代海に関連した国の諸機関及び地方自治体を実施する調査研究、再生に向けた取り組みを評価する組織「有明海・八代海総合調査評価委員会」の任務を5年後に見直すことにしているため、法の継続のためには国会審議が必要となります。ところが、委員会委員を国会承認にするか否かで自民党と民主党の折り合いがつかず、継続審議になったままで成立の見通しが立っていません。有明海特措法の必要性は与野党とも十分に認識していて、委員会の構成だけが対立点ですから、有明海総合研究プロジェクトの予算獲得に影響があるとは思えませんが、少々気になる事態ではあります。

有明海を取り巻く最近の  
状況

～有明海調査研究  
マスタープラン作成～

## 有明海調査研究マスタープラン作成

有明海特措法に基づき環境省に設置された有明海・八代海総合調査評価委員会は平成18年12月に有明海に関するこれまでの取組を評価した最終報告書を提出しました。その最終章「再生への取り組み」において、今後各機関が取り組む調査研究の方向性とその道筋を示すマスタープランを策定することを提言しています。提言を受けて環境省がマスタープラン原案の策定作業を全国公募した結果、独立行政法人水産総合センター西海区水産研究所、特定非営利活動法人有明海再生機構、いであ株式会社が共同で受注しました。3者で事務局及び外部委員も含めた3つの調査部会を設置してマスタープランづくりの作業に入りました。佐賀大学有明海総合研究プロジェクトのメンバーも有明海再生機構の構成員として重要なポジションを占め、連日膨大な作業をこなしています。まず国、地方自治体、大学等の諸機関でこれまでに実施されてきた調査研究の成果と今後の調査研究計画に関するアンケート調査を行い、それを分析して有明海に関する調査研究の成果と今後の方向性を整理します。また、今後諸機関が行う調査研究の中で重なっているもの、調整した方が効率的だと考えるものをリストアップするとともに、諸機関が計画している調査研究に欠けていて「調査研究すべき課題」を洗い出します。さらに、今後の調査研究をどのような日程で実施するべきかを示すロードマップを策定するまでが任務です。



調査の様子

これまでの調査研究成果全体を把握し、今後の方向性を示す作業は、膨大な時間と集中力を必要とします。さらに、委員間で異なる意見、方向性を調整し、一つの案にまとめ上げるには、相当な調整力が必要とされます。有明海総合研究プロジェクトの若手教員2名が3つの部会の内の2つの部会のリーダーを務めています。皆が長期休暇を楽しんでいる年末年始の時期に作業に忙殺されている彼らの姿を見ると、環境省からの作業受注を画策した者としては内心忸怩たる思いに駆られます。我々が取り組む地域環境問題は、研究者だけが単独で研究しても大きな成果は得られません。研究者、行政、市民全体で調査研究成果を共有し、目指すべき方向性を一つに纏めたときにやっと成果が得られます。地球環境、地域環境問題に取り組んでいこうとしている若い研究者達にとっては、貴重な経験なのだと思えて貰って、許して貰うことにします。

## 環境省の有明海・八代海総合調査推進業務について

大串浩一郎（有明海総合研究プロジェクト副プロジェクト長、コア研究1、理工学部都市工学科）

環境省の有明海・八代海総合調査推進業務について

平成14年11月に公布・施行された「有明海及び八代海を再生するための特別措置に関する法律」により設置された環境省の有明海・八代海総合調査評価委員会では、平成18年12月に委員会報告を提出しました。報告書の中では、具体的な再生の目標として、1)希少な生態系、生物多様性及び生物浄化機能の保全・回復、2)二枚貝等の生息環境の保全回復とバランスのとれた水産資源の回復が挙げられ、さらに今後の調査研究の基本的な考え方として、解明すべき重点事項、マスタープランの作成、総合的なモデルの構築、総合的な評価の仕組み、海域環境モニタリングの継続・強化などを示しています。以上のような状況を受けて、環境省では、平成19年5月に「有明海・八代海総合調査推進業務」の公募を実施しました。その結果、独立行政法人水産総合研究センター、特定非営利活動法人有明海再生機構、いであ株式会社の3者による同業務（調査研究のマスタープラン）が同年7月にスタートしました。

業務には2つの柱があり、1つは、マスタープラン（総合調査推進計画）の策定であり、もう1つは、情報共有や連携強化に資するその他の措置です。前者の中では、

- ①調査計画や成果等に関する情報収集、データベース化
- ②連携協力が効果的な調査、補完すべき調査等の特定
- ③関係機関間の連絡調整（必要に応じて現地調整会議を開催）
- ④総合調査推進計画（案）の策定と評価委員会への報告

があり、後者では

- ⑤情報共有の促進（データベースのリスト化、データベースの利用及び運営に関する指針の作成）
- ⑥調査観測指針等の策定（共同調査の実施促進、データの有効活用）

が具体的な作業として挙げられています。これらの作業を実施する組織には、上記の3者のメンバーが入っており、総合調査推進計画（案）作成チーム、計画データベース（以下 DB と略す）作成チーム、成果・情報等 DB 作成チーム、調査観測指針等検討チーム、DB 検討チームから成る事務局以外に、以下の3つのワーキンググループ（以下 WG と略す）が組織されています。

- (1) 漁業・生物 WG
- (2) 河川・海域環境 WG
- (3) 物理・モデル WG

佐賀大学有明海総合研究プロジェクトでは、設立当初から地元との連携を重視し、国や県、市町村、漁連・漁協、市民などとの関わり合いを密に行ってきた所ですが、NPO 法人有明海再生機構に所属しているプロジェクトメンバーも多く、荒牧教授、大串准教授、速水准教授、山本講師などが、この調査研究のマスタープランの業務にも携わっています。上記の総合調査推進計画（案）作成チームには4名全て、調査観測指針等検討チームには山本氏が、DB 検討チームに速水氏が、河川・海域環境 WG に速水氏、山本氏と首都大学東京の横山准教授が、物理・モデル WG に大串と速水氏が入って作業を行っている所です。速水氏は河川・海域環境 WG の主担当者として、また、大串は物理・モデル WG の主担当者として、他の2者（水産研究所といであ）のメンバーや外部有識者も含めた WG をまとめて議論を進めています。

これまでに、事務局会議を7回、3つの WG の会議をそれぞれ1回、現地有識者説明会を佐賀市と熊本市でそれぞれ1回ずつ開催し、この業務の作業を進めるとともに、現地の声も反映させたマスタープランとすべく努力を続けている所です。その検討結果は、以下のホームページにて見ることができますので、是非、ご覧いただければ幸いです。

平成19年度有明海・八代海総合調査推進業務

<http://cse.fra.affrc.go.jp/kotani/AYRP/main-index.htm>

この有明海・八代海総合調査推進業務では、平成19年度から3年間かけて調査・研究のマスタープランをまとめ上げます。平成20年度からの5年間の間に各調査研究機関の連携による調査やデータベースの共有・公開といったことが推進され、より効率的で持続可能な取り組みが実施されることが期待されます。

以上のように、有明海や八代海の今後の再生に向けた国や地域の取り組みに対して、佐賀大学有明海総合研究プロジェクトはそのコアとなる部分で大きな貢献をしています。今後の有明海・八代海の再生のための施策に本プロジェクトの成果も大いに生かしたいと考えておりますので、関係諸氏のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

## 「日本水環境学会ノンポイント汚染研究委員会公開シンポジウム」が開催されました

「日本水環境学会ノンポイント汚染研究委員会公開シンポジウム」が開催されました

山本 浩一(有明海総合研究プロジェクト 講師、コア研究1:環境物質動態研究部門)

2007年9月5日に佐賀県青年会館(佐賀市)で公開シンポジウム「わが国におけるノンポイント汚染研究の到達点と有明海流入負荷把握への課題」(主催:日本水環境学会ノンポイント汚染研究委員会、共催:日本水環境学会九州支部、佐賀県、有明海再生機構、佐賀大学有明海総合研究プロジェクト)が実施されました。本プロジェクト環境物質動態研究部門(山本・原田)が事務局となって主体的に企画運営を行いました。

このシンポジウムは、有明海流域からの汚濁負荷把握について最新の知見をもとに意見を交換する目的で開催されたものです。シンポジウム前半はノンポイント汚染研究の黎明期から30年以上研究を継続されてきた市川新博士(元福岡大学教授)、浮田正夫博士(山口大学名誉教授)、橘治国博士(元北海道大学助教授)の3名の研究者を迎え、水質汚濁研究の歴史と最新の知見が講演されました。

シンポジウム後半では楠田哲也教授(北九州市立大学)、坂本清一氏(環境省)、白谷栄作(農林工学研究所)、朝田将河川環境課長(国土交通省九州地方整備局)、海老瀬一教授(摂南大学)、速水祐一准教授(佐賀大学有明プロ)によるパネルディスカッションが行われました。

参加者は計128名にのぼり、大学関係者82名(うち学生48名)に加え、学内外から31名の参加を得ました。会場では大変活発な討論が行われました。

本シンポジウムは平成19年9月4日付けの読売新聞に掲載予告が掲載されたほか、佐賀新聞(平成19年9月6日付け)で紹介されました。

(佐賀新聞平成19年9月6日 23面より)

海や河川の環境汚染の現状や研究の方向性を探るシンポジウムが5日、佐賀県の県青年会館であり、研究者や環境省の担当者が、パネルディスカッションで意見を交わした。パネリストは有明海の干潟の生態系を研究する速水祐一助教授らが努めた。海域汚染への影響研究のため、長期的なデータ蓄積や年間を通じた観測の必要性を提言。今後の課題として、重金属や有機物の流入量分析の精度向上や、河川の浄化機能の再評価などを指摘した。シンポは、雨水や地下水として海や川に流れ込む大気汚染物質や、肥料などの影響を調査する日本水環境学会ノンポイント汚染研究委員会(委員長・國松孝男滋賀県立大学教授)が開いた。



前半は3名の研究者による講演  
(写真は浮田正夫山口大学名誉教授)



後半は5名のパネラーを迎えパネルディスカッション



全国から128名の参加があった



質問に答える速水准教授

## 「有明海と環黄海圏」

武田 淳 (佐賀大学農学部地域資源学研究室)

「有明海と環黄海」

朝鮮半島の西側には水深 100m 以浅で、中国大陸の内部を南から北に向かって入り込んだ大きな湾入部は、黄海と渤海を含む海域である。長さ 5,464km を持つ世界屈指の大河・黄河は、内陸部からおびただしい浮泥を黄海に運び込む。最大 9m 以上というアジア最大の干満差が見られる韓国西海岸の仁川に代表されるように黄海や渤海沿岸は潮汐差が際だっている海域で、有明海をしのぐ広大な干潟が存在している。平均水深 20m の有明海は、規模の大きさと高緯度(北緯 34 度以北)に位置することで黄海と渤海との違いこそあれ、よく似た特徴を持ち、共通するものが多く、地史的にも社会・文化的にも関係が深い。黄海、渤海や朝鮮半島の沿岸に生息する生物種が有明海や瀬戸内海など一部の内湾だけに共通するものもその由縁である。沿岸性大陸遺留種とか遺存種(continental relict)と呼ばれるエツやムツゴロウといった有明海を代表する特産種の存在は、寒い氷河期の名残として、大陸との結びつきがあったことを物語る。

中国では今夏のオリンピックを控え、内陸部の開発が著しいと報じられていることから、渤海湾や遼東湾の湾奥部において相当に汚染が進んでいると想像してしかるべきだろう。これが一体、湾奥部の漁撈にどの程度の影響を与えているのか？はたまた現在、どんな干潟漁撈が展開されているものなのか？有明海の湾奥部で展開されていたような多彩な漁撈が存続しているのだろうか？有明海と韓国の干潟を現地調査するようになって以来、ずっと気になっていた課題であった。

それがついに昨年夏、できるだけ黄海と渤海の海況をつぶさに観察しながらフェリーで渤海湾と遼東湾を廻る現地調査の機会を得た。具体的な報告書は紙数の制約もあり別稿に譲るとして、駆け足三週間の足跡を記してみる。

博多  
↓  
釜山  
↓  
ソウル  
↓  
仁川  
↓  
大連  
↓  
營口  
↓  
田庄台  
↓  
二界洵  
↓  
秦皇海  
↓  
大連  
↓  
烟台  
↓  
青島  
↓  
下関



調査のルート

8月4日、博多からビートル号で韓国・釜山に入り、高速バスでソウルへ向かう。ソウルにいる教え子の李應喆君(ソウル長神大学講師)などと研究打合せを済ました。7日に電車とタクシーを乗り継いで、仁川港にたどり着いた。乗客たちが長い列をつくり、ごった返していたが、日本にいるときに李君に仁川から中国・大連を結ぶ国際カーフェリー「大仁」号(12,000トン)のチケットの予約をお願いしていたこともあり、窓口には並ばずに済んだ。夕方5時に出港したフェリーは13時間を



干し小魚の選別



干しエビ加工



みのくち式ポンプ

要して8日朝8時に大連港に入港。560万人という大人口を擁する街にある大連大学に出かけ、研究打合せをし、資料や文献等を収集、ナマコなどの養殖に関わる情報を得た。三泊後、11日大連からバスで終点の営口へ。ここでバスを乗り換えて田庄台に到着し、駅前の安宿に荷物を置く。田庄台は日本人がまず訪れることもないような人口の希薄な町である。広陵とした大陸に米を産地とする田園が広がる。早速、耕耘機を三輪車風に改造した車をチャーターし、田庄台から15キロほど離れた二界洶まで出かけた。途中、干しエビや干し小魚をつくるニオイが立ちこめる漁村であった。古い木造船で各種の漁法と黄海の魚を捕っている。

調査から宿に帰るのを待っているかのようにピカピカと光る黒塗りの車が一台宿の前にとまっていた。もしや公安関係の人じゃないかと一瞬心を横切った。多分、宿の叔母さんが伝えたのかもしれないが、風の便りに風変わりな日本人が駅前の宿に投宿していることを聞きつけてやって来たのは、任徳征氏であった。日本人に案内したいところがあったようで早速、彼の車に乗せてもらって出かけた先は、なんと戦前の昭和16年12月に東京・荏原製作所が製造した「みのくち式ポンプ」8基が稼働している現場であった。河口に近い川の水を汲み上げて、遼寧省営口市大洼鎮（県に相当）に住むおよそ7万人近い人々の田圃に灌漑用水を供給している。それを管理する水利局の局長である任さんは、日本人が中国のために残してしてくれた日本製の機械が、故障一つなく今なお稼働していることを誇らしげに熱心に語ってくれた。

観光地でも何でもなし、まさかこんな何もないところに日本人がやって来たことに彼はきつと驚いたにちがいない。別れ際に今度、ここに来るときは是非、連絡して下さいと自分の携帯番号を丁寧に教えてくれた。拝金主義に走る中国の世界でこんな立派な紳士にお目にかかれたことが内心嬉しかった。また中国で行ってきた日本の過去の負債が目立つ中で、現地に残してきた日本製のものを破壊することもなく、大事にちゃんと稼働させている任さんたちの努力にも頭が下がった。同時に我々日本人の先輩たちが頑丈で素晴らしい機械を製作してくれたことに心が弾んだのも本音である。

12日早朝、田庄台からバスに乗り、盆錦



クラゲの水揚げ



クラゲの加工

日本海沿岸域にもその影響が広くおよんでいることは周知の事実である。そして1990年代に入ってから「環黄海圏」という用語が一般化し、日本・韓国・中国三国間で、経済・文化活動を含む人的交流が活発化し、年々拡大の一途をたどっている。こうした流れの中で、学術的にも今後、学際的かつ総合的な視点で共同調査研究を強力に推進しなくてはならない時期に来ていることを切に感じた。今後、有明海の厳しい現況を鑑み、その再生と保全の道を模索するとすれば、環黄海圏をも視野に入れておく必要がある。

今回はフェリーとバスを乗り継いだおかげで珍しい「落としもの」に会い、手荷物にもならない大切なお土産を持ち帰ることができた。ちなみに帰国後、インターネットで荏原製作所にアクセスしてみた。そして件のポンプの箇所を以下に要約してみるが、実に素晴らしい機械を世に送り出す会社として世界に冠たる日本の企業であることを知った。

1927年(昭和2年)、荏原製作所(1920年株式会社設立)がポンプを、東京明電舎がモーターを製作した排水機「ののくち式渦巻ポンプ」は、羽車で水流に遠心力を与えて送出するもので、毎分55.2立方メートルの排水能力を持ち、当時として斬新なものであった。石川県金沢市出身で1882年に工部大学校機械科を首席で卒業、工部大学校教授補となり、後に東京帝国大学教授になった井口在屋(いのくちありや)が発明し、教え子の畠山一清(はたけやまいっせい)と共同で流体機械の改良に関する特許を大正3年に取得、実用化を進めた揚水用ポンプは、昭和40年代まで用いられてきた。その後、畠山は井口機械事務所(現在の荏原製作所)を設立、ののくち式渦巻ポンプを製作し、この分野では世界的な水準となった。(敬称略)

を經由して万里の長城の東端になる山海関に出た。昼を近く食堂で済ましてから海が見える集落までタクシーを拾い、夏なら海水浴客で賑わう海岸は、干潟漁撈とは無縁な砂浜であったが、道中の海浜の様子をうかがい知れた。バスに再び乗り込み、秦皇海に向かった。駅前で下車後、駅近くに宿をとる。三泊し、周辺海域の漁撈に関する図書、文献を収集に奔走した。

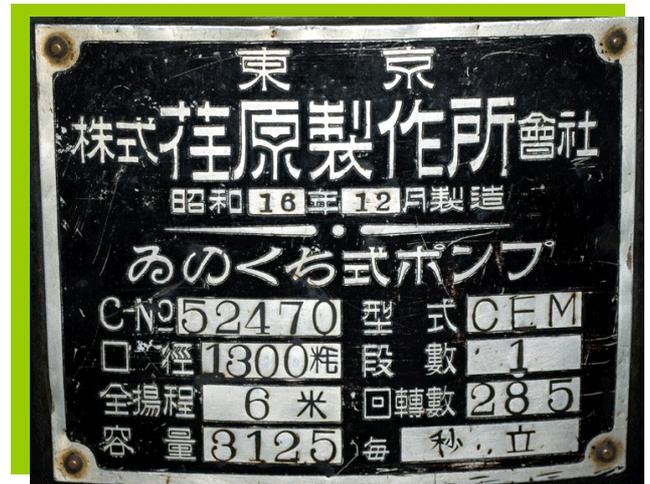
当初、秦皇海から黄海を山東半島の烟台まで船で渡るとりだったが、船が就航していないことが分かり、結局、高速バスで秦皇海の駅前から大連まで引き返す羽目になった。大連で一泊したあと、遼東半島サイドの大連から船で烟台に渡り、情報収集後、バスセンターから青島に向かう。終点の青島・長途に着いた時は暗くなっていたが、宿探し。いくつも尋ね歩くうちに手頃なところが見つかり、ここで三泊するあいだ、青島周辺海域の漁撈に関わる現地観察と資料収集を試みた。

青島と下関を二泊三日で結ぶ国際フェリー「ゆうとびあ」号(約27,000トン)は18日夜20時に青島を立ち、韓国済州島の南方を航行しながら、20日午前10時に下関に入港し、帰国の一歩を踏んだ。

三週間という実に短い予察行だったが、環黄海圏の漁撈では養殖を主体とする海面漁撈が中心になり、干潟漁撈においても大なり小なりの変容の波が現実押し寄せていることが分かった。

今回の中国行で知ったことの一つに中国の街には、たったの一元(およそ16円)で乗れる市内を縦横に走る路線バスがある。路線バスの番号とコースが幾重にも記載されてある観光地図は、地元で手に入る。同じ漢字を使う国同士ゆえのメリットとして、それをフルに活用しない手はない。

最後に、中国と朝鮮半島の間位置する黄海と渤海の沿岸地域は「黄海圏」とも呼ばれていたように、古くから文物や人々の往来が盛んだった。さらには中国と朝鮮半島の交流は、北部九州や



ののくち式ポンプ製造ラベル

※写真はいずれも二界海で撮影(2007/8/11)



Thank  
You!

# おつかれさまでした

## 有明海総合研究プロジェクトを去るにあたって

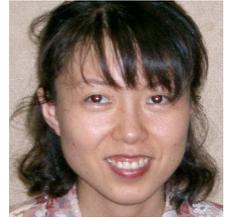
加(槻木)玲美 (東北大学大学院生命科学研究所マクロ生態 所属)

加(槻木)玲美  
Kuwae(Tsugeki)  
Narumi

コア研究1  
環境モデル部門

非常勤研究員

在籍期間  
2005年10月1日  
|  
2007年9月30日



微細藻類の研究担当者として、2007年9月まで在職しておりました加(槻木)玲美です。在職時は、佐賀県海域に広がる広大な干潟上の一次生産者である底生珪藻類や、ノリ養殖に多大な影響を与える冬季の赤潮形成種である珪藻・渦鞭毛藻類の動態に関する研究を行い、まさに泥の海、有明海の生物の特殊性に触れる機会を得ました。

僅かな研究期間でしたが、有明海の干潟域で見られる珪藻種が日本で確認されていない、新種である可能性の高い種が多数出現すること、しかも、季節毎にその優占種が大きく入れ替わるという予想を上回る興味深い結果が得られつつあります。これまで、有明海干潟のシンボリック存在、ムツゴロウの餌となっている微小な藻類に対しては、あまり目を向けられてきませんでした。有明海の特殊性を考える上でも重要な生物だと思います。佐賀県には、このような特殊な生物が生息する貴重なフィールドが一帯に広がっていることを改めて痛感しました。最後になりましたが、プロジェクト関係者の皆様には、在職中、様々な面で研究のバックアップをして頂き、本当にありがとうございました。今後は、プロジェクト在職中に得た知力を基に有明海の成果をまとめ、発信していきたいと思っております。今後どうぞよろしくお願い致します。

## 有明海総合研究プロジェクトにおける研究を通じて得たもの

田代幸寛 (有明海総合研究プロジェクト 所属)

田代幸寛  
Tashiro  
Yukihiro

コア研究2  
微生物相部門

非常勤研究員

在籍期間  
2006年4月1日  
|  
2008年3月31日



平成18年4月から2年間、佐賀大学有明海総合研究プロジェクト微生物相研究部門で非常勤研究員としてお世話になりました。本プロジェクトでは、これまでに調べられていなかった「分子生物学的手法による有明海干潟泥に生息する細菌相解析」を主な課題として研究に従事しました。私の元々の専門は微生物工学であり、分子生物学や微生物生態学等の基礎研究に領域が変わることには予想以上の戸惑いがあり、初年度は非常に苦労しました。しかし、次年度には有明海に常在する細菌や季節とともに変動する細菌を決定し、学会発表等の成果を上げることができました。本プロジェクトに在籍した2年間で私は新しい研究領域における知識や技術を習得することができました。しかし、

それ以上に研究における人のつながりの重要性を認識し、新たな人脈を築けたことが今後の研究への財産になると思っています。最後に、様々な学会やセミナー等への参加する機会をくださり、ご助言、ご指導を賜りました有明海総合研究プロジェクト微生物相研究部門 小林元太准教授ならびに有明海総合研究プロジェクト長 荒牧軍治教授を始めとする同プロジェクトの方々には厚く御礼申し上げます。